

伝え

日本口承文芸学会 会報

第49号 2011年11月 発行

日本口承文芸学会

〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1-25

白百合女子大学 間宮史子研究室

TEL 03-3326-5144 (内線207) / FAX 03-3326-1319

E-mail koshobungei@mail.goo.ne.jp

3. 11 後の口承文芸研究

間宮 史子

『伝え』は次号で50号になる。創刊号は24年前(1987年9月)、日本口承文芸学会が創立10周年を迎えた機に発行された。当時の会長小澤俊夫氏は、その巻頭言「会報『伝え』の創刊にあたって」で「(…)全国各地の会員の情報交換・意思の疎通は十分でなかった。この会報が、その弱点を補うものとなるよう期待している」と述べている。

以来、歴代会長の巻頭言は、「何かを創り出す集団でありたい」(川田順造氏)、「伝承の実態に即して」(大島建彦氏)、「会への期待」(飯倉照平氏)、「外に向けての機能」(野村純一氏)、「口承の時間と空間」(三浦佑之氏)、「資料の保存と公開」(常光徹氏)、「口承文芸の政治学」(石井正己氏)、「先学からの伝言—国際化を視野に」(荻原真子氏)、「一つの曲り角」(大島建彦氏)、「学会代表を引き受けるにあたって」(花部英雄氏)と続く。

創刊号の巻頭言には「会報発行のアイディアは、若い理事たちから提案され、若い理事と会員たちにより、編集のための委員会が設けられて、実行される。十周年にふさわしい、発足のあり方であったと思う」とある。実は当時「若い会員」であった私もその編集委員のひとりだった。その後『伝え』には折に触れて、大会や例会の報告、ドイツ・テュービンゲン大学留学中の報告などを寄せてきたが、会長として巻頭言を書くことになるとは思いも寄らなかった。このたび、口承文芸研究に携わるひとりとして、微力ながら学会運営のために力を尽くそうと思っているので、会員諸氏のご協力を仰ぐ次第である。

3月11日の東日本大震災と原子力発電所の事故以降、私たちは否応なく自分たちの足元を見つめ直さざるをえなくなった。未曾有の大災害に直面し、非日常が日常にとってかわったような日々にあって、私もことばを失い、途方にくれて、どうしたらよいかわからなくなった。研究どころではないという状態に陥り、こんなときに口承文芸研究がなんの役にたつのか、とも考えた。勤務する大学の卒業及び入学関連の行事がすべて中止になり、授業開始も延期されるという非常に落ち着かない時期に、役員改選後の新理事会が開かれ、会長と事務局をお引き受けすることになったわけである。

3.11後、神戸女子大学での第35回大会、震災の影響で延期になっていた第61回研究例会が無事に開催された。機関誌『口承文芸研究』は第35号を編集中、会報『伝え』はまもなく第50号を数える。多くの先学の努力によって積み重ねられてきた本学会の活動をさらに続けていくことの重要性は明らかである。私も改めて、ことばや声の力、物語の力、物語る想像力とそれを受けとめる想像力について、会員諸氏とともに考えていきたいと思う。そうすることで、いまの時代の「口承文芸」と口承文芸研究の意味、さらに、学会のあり方を新たに見いだしていくことができればと思っている。

(神奈川県)

阪口弘之氏のこのたびのご講演は衝撃的であった。氏のご論文でその存在を知ってはいたが、内容について全く未知であった新出の家蔵本『安達物語』の詳細なる紹介もさることながら、在地性が強く『師門』『月かげ』『はもち中将』『明石の三郎』『堀江物語』『むらまつの物語』『よしのぶ』などと同系の武勇・復讐譚で、結末で本地譚の形式をとる当作品について、単なる紹介に終わらせず、その検討を通して特に東北の在地物とされ、奥浄瑠璃の生成基盤につながる古態性を有する作品群について、江戸・上方といったいわゆる中央の近世都市地域における古浄瑠璃などとの複雑な絡み合いを視野に、その成立にいたる可能性を展望する実に壮大なものであった。

氏の主要な論点は次のようである。①奥浄瑠璃とは、②中央からの本文移入、③在地伝承による自在な増幅（加除変更）、④『安達物語』について、⑤『安達物語』の成立時期、⑥観応の擾乱（一三五〇～五二の足利幕府の内訌）、⑦『安達物語』の語り口調。その中で氏の視点は、第一に奥浄瑠璃が長い語りの歴史を持ちすぐれた物語構造を持っていること。しかもそれらが中央の語りものとの交流の所産として捉えられており、その意味で中央の補完史料となりうるということである。第二に『安達物語』を、今日伝説としても伝えられる『安達絹』所載の「安達太郎明神箕輪権現鬼面骨明神縁起」に材を取った在地の伝承としての可能性を示唆する。第三に在地における作品の増幅（＝創作力）に注目する。『安達物語』のテキスト自体は安政五年のものであるが、八段物の長編でその成立は相当古く中世末から近世初頭にも想定できると見る。しかしながら一方そこには、ボサマヤジョウウルリさんといった中央の古浄瑠璃の表現に精通した達者な語り手の存在があり、彼らが浄瑠璃の常套的趣向や慣用的な口吻を巧みに繋ぎ合わせる綴織的手法によって仕立て直し、古態を装った東北根生いの物語として語り継いできたとする見方も成り立つという。さらにその語りの背景には吉良と畠山が対立抗争した東北内乱があるのではないかともいう。

かように奥浄瑠璃の研究は非常に煩雑で一筋縄ではいかない。その意味で氏の言う悉皆調査なくしては初期浄瑠璃本を考えられないという見解はきわめて妥当であろう。その上であえて希望を申し添えれば、奥浄瑠璃作品それ自体の在地でのあり方がどうであったのかを問うてみたいところである。いずれにせよ、奥浄瑠璃研究を今後さらに大きくおし進めるご発表であった。（大阪府）

第35回日本口承文芸学会大会 公開講演報告2

根岸 英之

今大会は、口承文芸研究を、主にマテリアルな観点から見直そうという、大会委員の意図が明確に設定されており、樋口氏の講演も、まさにこうしたテーマにふさわしい内容だった。

氏は、1960年代以降、日本で記録された30万件を優に越えるであろう口承文芸の音声記録を、デジタルデータ化し、さらにデータベースとして保存共有していくことの必要性を感じ、2001年から「日本民話データベース作成委員会」をスタートさせた。

講演では、「民話記録の保存とデジタル化の必要性」「データベース化のメリット」に触れた後、「日本民話データベース」と、沖縄伝承話資料センターによる「沖縄伝承話データベース」の取り組みの経緯や、作業の実際を紹介され、スクリーンにデータベース画面を映しながら、具体的な中身について話された。

さらに、韓国におけるデータベース化の取り組みも紹介し、国際的な視野に立ってのデータベース化の可能性についても言及された。

私自身も、学生時代から採り貯めたカセットテープの音源が、押入れに仕舞われたままになっており、こうした音源が貴重な文化資産であることは充分承知しながら、具体的な保存や共有化に向けての第一歩が踏み出せないでいるなか、学会でこうした講演がなされたことは、今後大きな意味を持つ。

ただし、話者の個人情報など、どのように公開、共有化していけばいいか、慎重に議論しなくて

はいけない課題も感じた。

また、各地の地方大学や地域博物館、国立歴史民俗博物館のような公共機関での保存といった連携体制を確立していく取り組みなども、将来的な展開として求められるものであろう。むしろ、学会として、こうしたデータベース化に積極的に関わっていくような体制作りが図れないかと、考えさせられた講演であった。
(千葉県)

第35回日本口承文芸学会大会 公開講演報告3

武藤 美也子

このセンターでは沖縄祭祀研究会が1978(昭和53)年から1998(平成10)年の21年間に渡り調査した祭の記録写真約8,500枚をインターネット公開している。収録する祭は33、種類別では28、地域的には北は伊平屋島、南は波照間島、西は西表島と、沖縄全土に渡っている。このデータ公開の目的は、

- 1 沖縄の祭の実像を知ってもらう
- 2 沖縄の祭を追体験できる
- 3 消えていく祭の姿を残しておく

この目的を目指し、また多くの写真の中から目的の写真に到達できるよう3種の検索方法を設定した。

- 1 地図からの検索
- 2 祭祀日程表からの検索
- 3 キーワード検索

すべての検索は2の祭祀日程表に導かれ、これが核になる。この祭祀日程表では各祭の内容を一覧でき、その内容は祭の全貌が分かるように、時間軸に沿った詳細な内容になっている。そして表の写真をクリックするとその儀礼の写真へと導かれる。

写真は一儀礼に一枚ではなく多角的に映像を収録し、各写真にも説明書きがあり、日程表の説明と重層構造になっているため、居ながらにして祭祀を追体験できる。今後音源も随時追加される。

1の地図からの検索では広大な県の沖縄県で、地域毎の祭祀を知ることができ、一覧表に飛ぶことにより、同じ祭祀が他地方にもあることが分かる。3のキーワード検索では共通語とウチナーグチの対比表が作ってある。例えば表を参考に「ノロ」or「ヌル」で検索する。また一般的呼称で検索することもお勧めである。例えば「ハーリー」よりは「船」で検索した方が船の儀礼全般がヒットし、その中にハーリー、船漕ぎ儀礼等が入ってくる。

最後にこのデータベースの特徴を纏めておく。

- 1 地図からの検索で広い地域の祭を比較
- 2 一覧表により各地の祭を通覧一同じ祭の分布を確認
- 3 キーワード検索で他地域と内容を比較
- 4 多様な画像による多面的映像を収録
- 5 日程表と写真から、祭を追体験—音源も追加予定

またここにデータ公開している祭については、祭毎に報告論文(『沖縄の祭祀』三弥井書店 『沖縄祭祀の研究』翰林書房他)が発表されおり、より詳しい内容を知ることできる。

これらの祭の中には消滅してしまったもの、変容著しいものが多い。このデータベースが、多くの人にとって沖縄を知る手がかりとなり、学術的にも多方面に有効に利用されることを願っている。
(神戸女子短期大学)

第35回日本口承文芸学会大会 研究発表(第1会場)報告1

入江 英弥

第1番目の発表は、内藤浩誉氏「白拍子伝承の一考察」である。

本発表は、「白拍子」という地名や、白拍子の伝承があるところがほとんど水辺にある点、その内容が利水や治水と関わる点に着目し、こうした伝承がその土地の環境のもとに育まれてきたことを説き明かそうとしたものである。今回は、とくに静岡県磐田郡旧白拍子村(現磐田市)の千寿前伝説

を取り上げて、千寿前の墓とされる傾城塚がもとは寺谷用水のほとりに位置したこと、この塚や千寿堂が天竜川の水害にさらされた土地にまつられたことに焦点を当て、そうした水の恩恵に浴すると同時に、被害に悩まされた土地の生活の中でこの伝説が伝えられて来たと言く。

伝説をその土地の事情から読み解こうとするオーソドックスな発表で、好感がもてた。磐田市の伝説については、現在、土地の人々はいかにこの塚や千寿堂を認識しているのだろうか。水難よけや水難者供養など、水害との関わりは何かあるのだろうか。そうした点を現地調査によって示されれば、なお説得力があるように思われた。

第2番目の発表は、神田朝美氏「乙女文楽—語られる大衆芸能」である。

本発表は、乙女文楽の現状と、当芸能の担い手がこの芸能をいかに認識しているかについて、現在継承している担い手への聞き取り調査から探ろうとするものである。事典では、乙女文楽は專業集団による文楽からの分かれではなく、大正期に人形の遣い手を少女にした、旦那衆による素人浄瑠璃が始まりであるためか、「大衆芸能」に分類される。だが、今日の担い手たちは自らの芸能を「伝統芸能」として認識している。そこから発表者は、「大衆芸能の伝統芸能化」という問題提起を行おうとされた。

発表者は、乙女文楽の現状を二人の人形遣いのライフヒストリーによって明らかにされ、一人は幼少時からプロの乙女文楽一座に参加して芸を磨いた女性であるが、もう一人は40代に大学の公開講座を受講して芸を身につけ、今ではプロとして活動している女性で、今日の担い手のあり方を考えさせられ、興味深かった。発表終了時間が迫り、そうした担い手がいかに自らの芸を捉えているかが、詳しくお聞きできなかったのは残念だった。(東京都)

第35回日本口承文芸学会大会 研究発表(第1会場) 報告2

立石 展大

泉治恵氏の「日本昔話における山姥のイメージ—岩手県の場合—」は『日本昔話通観 第3巻 岩手』で山姥が登場する186話を分析した発表である。このうち176話は原話を分析している。山姥を「人を取って食う山姥」と「福を授ける山姥」に大別し、それぞれを山姥が来る「来訪型」と人が山姥の所へ赴く「出発型」にさらに分けて、その特徴を明らかにした。具体的には一つ一つの話型に登場する山姥の特徴を挙げて、最後に山姥のイメージを次のように示している。山姥の外観は語られる場合と語られない場合があり、恐ろしい外観でも福を授けるなど外観と性質は一致しない。また山姥は大食で残虐である。神仏や人によって倒される一方、福を授ける存在でもある。そして山から来て山へ帰り、この山は奥山でかつ彼岸世界である。岩手の山姥の特徴を丁寧に示しており、今後は他地域や民間信仰などの山姥も視野に入れていくことが期待される。

黄地百合子氏の「昔話伝承における『会話』部分の働き」は、昔話が会話部分を核として語られることを指摘した発表である。まず会話部分が登場人物の性格や人柄を聞く者に伝えることを指摘。例えば会話部分以外で「やさしい」と言っても、どのようにやさしいかイメージできないが、会話表現によりその人物のやさしさが子どもにも伝わる。また一つの話がどのように伝承されるかを時間軸に沿って紹介し、その伝承の核に会話部分があり、話者はこの会話部分を覚えて話を語る様子を明らかにした。具体的には昭和39年に発表者の祖母が語った話、その語りを聞いた母親が昭和52年と平成12年に語った話の三つを併記して、実際に会話部分が受け継がれて昔話が語られることを指摘した。資料は活字化されたものだけでなく録音まで発表者が確認をしており、長年の調査に基づいた手堅い発表であった。(東京都)

第35回日本口承文芸学会大会 研究発表(第2会場) 報告1

高島 葉子

サハリン島アイヌ民族の3人兄弟譚の成立仮説(丹菊逸治)

サハリンアイヌの散文説話トゥイタハに多く伝承されてきた「三人きょうだい譚」は、隣接する

サハリン島北部のニヴフ民族からの影響で成立したとする仮説を提示する発表であった。

北海道にはほとんど例がない三人兄弟(姉妹)が登場する話がサハリンアイヌに多い一方で、ニヴフには三人の猟師が登場する話が豊富である。また、一般にサハリンと北海道におけるアイヌ口承文学の場合、一人称形式が基本であるが、「三人きょうだい譚」は三人称で語られるトゥイタハである。他方、ニヴフ口承文学は基本的に三人称形式であり、「三人の猟師の話」も三人称で語られる。そして、北海道においては援助者である登場人物の正体は大抵明かされるが、サハリンの「三人きょうだい譚」の援助者の正体は明かされない。これはニヴフの援助者と同様である。また、「三人の猟師」のうち一人の立場が弱いことはニヴフの社会制度と関連すると推測できる。これらのことから、サハリンの「三人きょうだい譚」はニヴフから伝播した可能性が高いと結論づけられた。

発表後、中川氏から三人称が特異であるなら、トゥイタハ全体がニヴフの影響を受けているということなのかという質問があったが、発表者からはこの話群に限るという回答がなされた。

アイヌ口承文芸における樹木神の **pasekamuy** 型伝承について (安田千夏)

アイヌ口承文芸における樹木神が登場する物語のなかで、**pasekamuy**(重要な神)とみなされる樹木神の神格は、森林形成における樹木の役割を反映しているという仮説を提示する発表であった。

まず、**pasekamuy** 型の物語に登場する樹木神の特徴のなかで、特に **pasekamuy** の樹木の多くが巨木であることに発表者は注目した。ハルニレ、イヌエンジュ、カツラ、ミズナラ、エゾマツなど **pasekamuy** 型伝承の樹木はすべて高木、条件次第では巨木になりうる。一方ニワトコなどの低木は **pasekamuy** とはならない。これを森の歴史、変遷との関連で考えると、こうした巨木になる樹木は森の歴史の後半に現れるという。森の始まりは先駆樹種に代表される陽樹の林であり、その後、高木になる陰樹が育って陽樹が枯れ、それを養分として陰樹の森が形成され、やがてミズナラ、カシワなどの巨木が並び立つ極相に至る。こうした森の変遷が樹木の神格に反映していると発表者は結論づけた。しかし、樹種によっては、巨木であるにもかかわらず重要な神とみなされない場合もあり、これには樹木の有用性も関係しているようだと言明があった。

アイヌの物語に登場する樹木神については十分に研究がなされてきたわけではない。その意味で今回の発表は有意義なものであった。(奈良県)

第35回日本口承文芸学会大会 研究発表(第2会場) 報告2

真下 厚

保坂達雄氏「佐銘川大ぬし由来記」の伝承世界」は琉球王国の第一尚氏王統に関する伝承を記した『佐銘川大ぬし由来記』をとり上げ、その叙述・表現を検討して生成過程について論じたものであった。第一尚氏始祖佐銘川大主の伊是名島脱出をめぐる叙述などが『中山世鑑』や『琉球国由来記』にみられる第二尚氏始祖尚円王金丸についての叙述に重なり、それは第二尚氏王統が続くなかで権威ある金丸伝承に意図的に重ね合わせられたものだろうとする。また、その表現には口頭伝承の痕跡がみられるとし、対句・繰り返し表現や雅語がみられることから、これらの記述はウムイなどの神謡に近い表現形態をもって謡われて伝承されてきた口頭伝承にもとづいたものと推定する。さらに、本書後半に記される家譜の記事からその成立年代を記事最後の年である康熙60年(1720)の後数年間とし、第一尚氏王統の末裔たちが口承してきたものを家譜作成を契機に一族の物語を創り上げたとしている。本発表は「氏族伝承とはいかなるものであったか」、「口頭伝承はどう書かれたか」という大きな問題に関わるものであったが、質疑の時間があまり確保できず議論を深めることができなかつたのは残念であった。学界において今後さらに追究すべき問題であろう。

齋藤君子氏「雀の仇討ち」の呪力—北東アジアの類話からの考察—は昔話「雀の仇討ち」について日本・韓国・中国・ミャンマー・ベトナム・ロシア・アメリカの諸民族に伝承される類話を検討してそれぞれの特徴を明らかにし、伝承の担い手や伝承の場、目的などを探ろうとしたものである。主人公・敵・助っ人はそれぞれ何か、また助っ人の擬人化や旅の有無などの点に着目して類話の特徴を把握する。そのなかで北東アジアから北アメリカにかけての諸民族の類話は天候を支配す

る荒ぶる神を敵とし、それを退治することによって天候の回復がはかれるというものであるとする。そして、漁撈・狩猟を生業とする民たちが嵐で漁や猟に出られぬときに天候回復を願って籠もり、昔話を語る習俗があるとし、この話もそこで語られたものだという。さらに、この話はこれらの地域では天候回復の呪術的機能を有しているが、それは日本の昔話の場合にもみられるのではないかとする。この説話について、その伝承の位相と関わって呪術的機能を有することが指摘されたことは興味深い。日本においても同様の伝承の位相にあったかどうか、生業の問題などと関わって展開されてゆくテーマであるように思われる。(京都府)

第35回日本口承文芸学会大会 シンポジウム報告

川森 博司

口承文芸研究の再編成

「怪談と口承文芸」 飯倉義之

「史跡活用と口承文芸」 加原奈穂子

「録音資料と口承文芸」 真鍋昌賢

司会 川森博司

今年度の大会シンポジウムには「口承文芸研究の再編成」をテーマとして選んだ。「再編成」という言葉に込めた趣旨は、「口承文芸」という問題設定は現代社会においても有効性を持っているが、それを活かしていくためには、口承文芸の研究対象を対面的な状況における口頭の言語伝承から拡大していく必要があり、そのためにはどのような構えが必要かを検討することであった。

一方で、現在進行形の口承文芸の時代は終わり、現在の課題は「もと口承文芸」の記録を研究することであるという立場がある。これも、口承文芸学会において真剣に取り組んでいくべき課題であろう。しかし、「口承文芸」という研究の視点は、現在進行形の研究対象についても有効である。そのことを示すために、「怪談と口承文芸」では大衆文学と口承文芸の境界線を、「史跡活用と口承文芸」では観光用の各種メディアに記載された伝説と口承の伝説の境界線を、「録音資料と口承文芸」では録音された音声資料と文字に記述された口承資料の境界線を、それぞれ再交渉することによって、「口承文芸」という視点を置くことによって見えてくる新たな領域を拓くことを試みた。

さらに、もう一つのねらいとして、現在における口承文芸のフィールドワークのありようを再検討することがあった。このシンポでいう「再編成」とは、フィールドワークを放棄することではない。ただ、現在の状況に対応した研究をおこなうためには、従来とは異なったフィールドワークのモデルが必要なのではないか。それは、二者の対面的な状況から見ると、「媒介」を経た状況のフィールドワークといっていよう。その媒介は怪談本という書物であったり、町おこしのための観光施設であったり、レコードであったりする。そのような媒介を含んだフィールドワークをどのように展開するのかというのが、もう一つの問いかけたい課題であった。

飯倉義之は、1990年代から勃興してきた怪談エンターテインメントである「実話怪談」を口承文芸の「聞き書き」を装う文芸ジャンルとして、百年前の『遠野物語』成立のありようとの連続性を指摘し、逆に、怪談文芸としての『遠野物語』を読む可能性も検討した。そこで示されたのは、『遠野物語』を名作として祀り上げるのではなく、その記述から口承文芸成立の場に立ち戻る読み方である。当時流行していた「怪談会」を口承文芸のフィールドワークの場として捉え返すことによって、「怪談」を現在進行形の口承文芸として捉えていく可能性を提起した。民俗学において「怪異」は、心意現象部門の「俗信」の事例として扱われてきた。つまり、「語られ方」よりも語られた内容に重点が置かれたのである。それに対して飯倉発表では、「語られ方」に焦点を当てる学としての「口承文芸学」の役割が示唆されたものと思われる。

加原奈穂子は、吉備路における桃太郎伝説の活用を事例として、口承文芸がさまざまな側面に応用される状況に取り組む研究方向を示した。昭和初期に、昔話であった「桃太郎」が「吉備津彦命

の温羅退治」に対応する史実として位置づけられたことから、地域おこしに「桃太郎」を活用することが始まった。つまり、昔話の「伝説化」がおこなわれたのである。そのような状況をめぐって加原は、「桃太郎の地域シンボル化」「伝説の定型化と簡略化」が進行していることを指摘し、一方で、文化財担当部署と観光担当部署の間に史跡活用をめぐって考え方の違いが生じていることに注意を喚起した。口承文芸が再利用されていく状況には、現場を訪ねてみて初めてわかることが多く、従来の口承文芸の採集とは異なる、新たなフィールドワークのあり方が必要とされることを加原発表は示唆していた。

真鍋昌賢は、浪花節のSPレコードを素材にして、浪花節の「声」の受容のされ方を検討した。SPレコードは約3分30秒のフレームに限定される。そのため、直接話法がカットされたり、演目が分割されたりして、物語全体よりも、「声」を断片的にアトラクションとして聴かせる方向に進んでいった。そして、それがまたSPと同内容の稽古本にも及んでいって、「声」を読み、またそれを音声で語るという状況が展開していくことになった。そのような入り組んだ状況の検討を「語り芸研究」に組み込むことによって、総合的なメディア文化の展開の中に「口承文芸研究」を位置づけていく方向性を真鍋は指摘した。

以上、三者の発表から、「語られ方」に注目する口承文芸研究の視点の必要性が、改めて浮き彫りにされたものと考えられる。フロアとの間では、口承文芸の「文芸」という側面の捉え方について、熱いやりとりがかわされた。今後の議論の継続を大いに期待するところである。(兵庫県)

第61回日本口承文芸学会研究例会報告

矢野敬一

語りの実践と「つながり」の創出 —まちづくり・記憶・文化資源—

2011年7月23日(土) 会場 白百合女子大学

本研究例会は、当初3月19日に 國學院大學で実施予定であった。しかし今回の大震災を受けて延期していたものである。また一連の事態を受けて全体のテーマも「語り(ナラティブ)と文化資源化」から、上記のものに変更したという経緯がある。

なお当日の報告者と、報告の題名は以下の通り。

矢野敬一(静岡大学教育学部)

小売業の外部性としての語りとまちづくり —新潟県村上市「町屋の人形さま巡り」を事例として—

金子淳(静岡大学生涯教育学習センター)

多摩ニュータウンにおける語りとその断層

矢野の報告は新潟県での商店街のまちづくりについて、語りに着目したものだ。商店街での道路拡幅という事態を前に、そこにある町屋の町並みが改めて文化資源化していき、その「場所性」に根差す形でどのように語りがなされていくのかを報告した。自然災害ではないが、町並みを破壊し大きく変えていくような事態に対して、まちづくりイベントの場での語りを対象として、まちづくりを通した「つながり」の創出にいかに関わり付けられていくのかがここで問われた。

金子の報告は多摩ニュータウンによる開発に焦点を当て、それがどう位置付けられ語られているのかを論じたものである。郊外ニュータウンにおいては、しばしば開発前と開発後の歴史の断絶が指摘される。多摩ニュータウンにおいても、その圧倒的な規模ゆえに歴史の「空白」が強調され、その「空白」以後の再生に照準した議論が多い。ところが実際には、単なる「空白」としてではなく、新旧住民それぞれの立場で、個々の経験に基づきながら開発前/開発後の連続性も意識されていた。この「空白」を埋めようとする語りは、新旧住民の間で隔たりがあるだけでなく、開発への向き合い方やその後の経験によっても大きく異なっている。こうした歴史の断層をつなぐ取り組みを焦点化することによって、金子はニュータウンでの「つながり」を改めて問い直し、最後に東日本大震災と関連付けて報告を締めくくった。(静岡県)

事務局便り

○事務局からのお願い

学会では、この度の東日本大震災で被災された会員の情報を集めております。被災された会員につきましては、今年度の会費を免除いたしますので、事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。(7月23日開催の第116回運営理事会で決定)

○会員の異動 (敬称略)

- 《新入会》 秋山雅子 (神奈川)・三浦詩織 (大阪)・鶴野祐介 (大阪)・山口良太 (大阪)・藤井佐美 (広島)・長畑俊道 (東京)・田村菜々子 (京都)・斎藤みほ (東京)
- 《再入会》 奥田統己 (北海道)・樋口淳 (神奈川)
- 《退会》 上江洲基 (沖縄)・岡田百合子 (東京)・落合奈央 (東京)・坂本勇 (大阪)・相馬胤道 (福島)・谷野典之 (東京)・時田アリソン (東京)・藤井知昭 (愛知)・森幹男 (埼玉)

○寄贈書籍

『新潟県立歴史博物館研究紀要』第11号 2010年3月 / 『新潟県立歴史博物館収蔵資料目録 山崎光子民俗服飾コレクション』2010年12月 / 井上さゆり著『ビルマ古典歌謡におけるジャンル形成』大阪大学出版会 2011年2月 / 立石憲利編『真庭市史料 第3巻 真庭市の民話 第1巻 (南部編)』真庭市教育委員会 2011年3月 / 神奈川大学日本常民文化研究所『歴史と民俗 27』2011年3月 / 『国立歴史民俗博物館研究報告』第161集、第163集～第166集 2011年3月 / 『国立歴史民俗博物館年報6 (2009年度)』2011年3月 / 日本民俗学会『日本民俗学』第261号～第266号 2010年2月～2011年5月 / 日本民話の会「日本民話の会通信」No. 215、No. 216 2011年5月、7月 / 神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』第43巻1号～12号、第44巻1号～3号 2010年4月～2011年6月 / 金子毅著『「安全第一」の社会史—比較文化論的アプローチ』社会評論社 2011年7月

○機関誌データベース化についてのお願い

学会では機関誌のバックナンバーをデータベース化して会員及び一般に公開して利用の便宜をはかりたいと考えております。データベース化は順次古い号から進めて参りますが、現会員で機関誌に執筆された方でデータベース化にどうしても不同意な方は、お申し出いただきたく存じます。通信等での個別の許諾はとりませんので、事務局宛にご連絡をお願いいたします。

なお、お亡くなりになった会員の方々には著作権継承者宛、個別に許諾の連絡を取ります。

* 今後、機関誌34号以降の執筆者については、データベース化に同意して執筆されたものとして許諾はとりません。

2010年10月1日

○事務局が下記に移転しました。

〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1-25 白百合女子大学 間宮史子研究室
Tel: 03-3326-5144 (内線207) / Fax: 03-3326-1319 (児童文化研究センター)
E-mail: koshobungei@mail.goo.ne.jp

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なされる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会HP (<http://ko-sho.org/>) から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。入会金1000円、年会費4000円です。郵便振替口座 00180-4-44834 をご利用下さい。